

コスモス 3月号

第73巻 第3号

◆宮柽二カレンダー(72) 三月の歌

走りゆく炎の後にあらはれて黒く潤ふごとき

焼け跡

歌集『藤棚の下の小室』

「草焼」と題する連作五首の最後の歌。野焼きをしている場面で、草むらを走る炎の後には、黒い焼け跡が現れる。その焼け跡を「黒く潤ふごとき」という。新しい草がよく生えるように草を焼く。病害虫の対策でもあり、豊かな実りを産むための営みだ。焼け跡の下には土がある。「黒く潤ふ」には、春を産み、生き物を産み育てる温かく強い土を感じる。また、雪の間に現れた黒く潤った土を連想する。草と共に生きる暮らし、暮らしの中の土の大切さを思った。

(松本 由利)